2/8(水)の資料

二宮翁夜話新釋

—生活再建の一礎石として—

菅原兵治著

三、天地の経文

菅原兵治著『二宮翁夜話新釋』より

夫れ誠の道は学ばずしておのづから知り、習はずしておのづから覚え、書籍もなく、記録もなく、而して人々自得して忘れず。是れぞ誠の道の本体なる。渇して飲み、餓えて食ひ、労れていね、さめて起く、皆此の類なり。古歌に「水鳥のゆくもかへるも跡たえてされども道は忘れざりけり」といへるが如し。夫れ記録もなく書籍もなく、学ばず習はずして明らかなる道にあらざれば誠の道にあらざるなり。それ我が教は書籍を尊まず。故に天地を以って経文とす。予が歌に「音もなくかもなく常に天地は書がざる経をくりかへしつゝ」とよめり、此の如く日々繰返し〳〵てしめさるゝ天地の経文に誠の道は明らかなり。斯る尊き天地の経文を外にして、書籍の上に道を求むる学者輩の論説は取らざるなり。よく〳〵目を開きて天地の経文を拝見し、之を誠にするの道を尋ぬべきなり。それは世界横の平は水面を至れりとす。堅の直は垂針を至れりとす。凡そ此の如き萬古動かぬものあればこそ地球の測量も出来るなれ。之を外にして測量の術あらむや。暦道の表を立て、影を測る法、算術の九々の如き皆自然の規にして萬古不易のものなり。此のものによりてこそ天文も考ふべく、暦法をも算すべけれ。此のものを外にせばいかなる智者といへども術を施すに方なからん。それ我が道も亦然り。天言はず、而して四時行われ百物成る処の不書の経文、不言の教戒、即ち米を蒔けば米がはえ、麦を蒔けば麦の實法るが如き萬古不易の道理により、誠の道に基きて之を誠にするの勤をなすべきなり。

〔註〕㈠中庸巻尾は「上天のことは、無声無臭にして至れるかな」とある。参照して味うべきであろう。
㈡同じく中庸に「誠は天の道なり。之を誠にするは人の道なり。」とある。天は無尽蔵の「まこと」のちからをもっている。然し我々人間の浅い知恵では仲々その道理を分かりかねることが多く、随ってそれを活用することも出来ぬ。だからそれを研究して明らかにし、十分之を活用して行くのが人の道であるというのである。
㈢論語陽貨篇に次の一章がある。

孔子があるとき
「わしはもう何も言うまいと思う。」
といった。すると弟子の子貢が
「先生が若しも何も言われないようになっては、私共は何をよりどころにして道を伝えましょうか。」
之に対して孔子は
「天何をか言はんや。四時行われ百物生ず。天何をか言はんや。―天は何も言わぬが、それでいて四時が順調に行われ、そのお蔭で万物が皆生育するではないか。天は何も言わぬよ。」
といったと。蓋し子貢は言語の士であったので、これに対する警しめの教えであろうが、天地に直参する農民に取っても好箇の教訓となるのではあるまいか。農業とは天意に従い、天候を活用して、地上に百物を生ぜしめて行く仕事であるから…。

猶、王陽明の次の詩はこれと関連しているから、ここに参考として抄出しておこう。

従来尼父欲レ無レ言。　　従来尼父言うこと無からんと欲すと
須レ信無言已躍然。　　須らく信ずべし、無言已に躍然たるを
悟到鳶飛魚躍処。　　悟到せよ、鳶飛魚躍の処
工夫原不レ在二陳編一。　　工夫原と陳編に在らず

〔解〕或る農業の老技師と話し合った時のことであるが、話が果樹栽培のことに及ぶや、その技師はいろいろと詳しい説明をした後で、「然し、実際に果樹の声を聴くことになると、私は某君に及ばぬ」といった。某君いうのはこの技師の教を聴いて熱心に果樹の栽培をしている老農のことであるが、これなどはたしかに「よく〳〵目を開いて天地の経文を拝見」することをいったものであろう。実際から入ったこの労農は勿論えらいが、然しこの老農を称えた老技師もまたえらい。学問から入っても此処まで来れば矢張り天地の経文を拝見せるものというべきである。

かくてこの章は決して「概ね学問を否定せるものではない。「「萬古不易」の「天地経文」を把握し、活用することの出来ぬ「書籍の上に道を求むる学者輩」の本読み学問、「生の尻」に学問―「生の尻」即ち「ものしり」物知り学問―に陥るなという警告である。このことは、かくいう二宮翁が幼少の時から如何に刻苦勉学した人であったかを思えば自ら分かるであろう。それに気付かずに「学ばずしておのづから知り、習わずしておのづから覚える」ものとなし、書籍も読まず、記録も編かず、師匠の言うことも聴かず、徒らにあさはかな我見を振り廻じては得々としているようでは、到底「天地の経文」の拝見は出来ぬであろう。要は「自然の則」たる「萬古不易のもの」をつかむことである。この章は相当の劇薬的教訓である。二宮翁位の学識と経験を有する人物にして始めていうべきことで、未熟な若輩が軽率に放言して自らの不勉強の弁解とするようなことは厳に慎むべきであろう。